

2026年共通テストの 結果を総まとめ！

国語、情報Ⅰ、数学ⅠA、物理の難化で全体的な平均点はダウン！

旺文社 教育情報センター 2026年2月27日

共通テストが1月17日、18日（追試験、再試験＝1月24日、25日）に行われ、今月、確定平均点等が大学入試センターから発表された。

志願者数は前年並みで、現役が減、既卒が増。全体的な平均点はダウンで、特に国語、情報Ⅰ、数学ⅠA、物理のダウンが響いた。

※本記事のデータは大学入試センター「実施結果の概要」(2月5日発表)をもとに作成。

※特に断りのない場合、データは本試験のもの。

※記事中「過去最高」等の表現は、1990年にスタートしたセンター試験を含める。

全体結果

● 志願・受験状況、平均点

- ・ 2026年18歳人口 … 110.3万人（旺文社予測）。対前年0.2%増。
 - ↳ 大学受験生数 … 68.4万人（旺文社予測）。同2.4%増。
 - ↳ 共テ志願者数 … 49.6万人。同0.2%増。
 - ↳ 共テ受験者数（追・再試合含む） … 46.4万人。同0.4%増。
- ・ 現役志願率 … 44.1%。同0.4ポイントダウン。

大学受験生数は対前年で2.4%増加する見込みだが、共テ志願者数は前年並みに留まった。共テ志願者は現役生が減少しており、年内入試への移行や、私立大一般選抜志望者の共テ回避が窺える。全体が前年並みとなったのは既卒生の増加によるもので、特に既卒2年目の志願者は4,000人も増えた（8,633人⇒12,516人）。その要因は、①現役のときは旧課程入試最後の年だったこと、②今年から共テがWeb出願になったこと、が考えられる。つまり現役のときに不本意ながら大学に進学した層が、出願がラクになった（冊子『受験案内』の入手不要、卒業証明書も不要）のをきっかけに再チャレンジしてきたと見られる。

現役志願率は今年から入試センターの算出方法が変更された。旺文社が同じ方法で過年度も算出したところ、対前年0.4ポイントのダウンとなった。

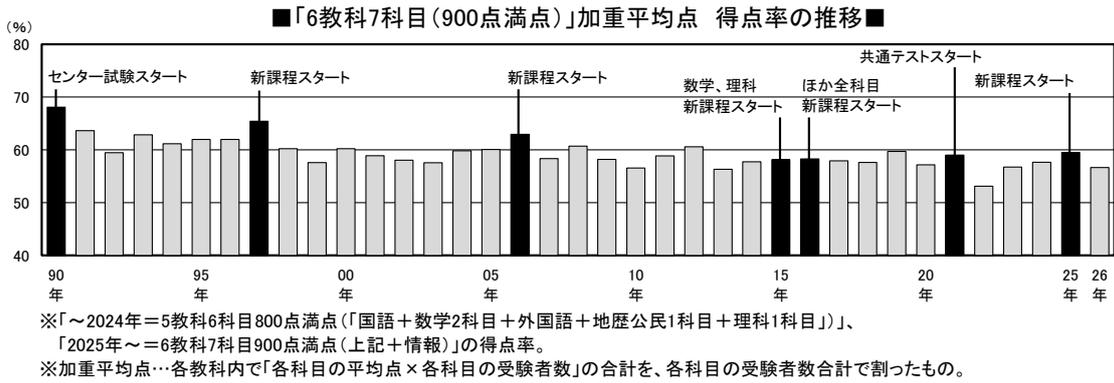
2026年度 大学入学共通テスト(本試験) 平均点等一覧[確定]

<2026年2月5日 大学入試センター発表>

教科	科目	2026年		2025年		平均点 前年差	
		受験者数	平均点	受験者数	平均点		
基幹3教科 平均点合計(600点満点) 【国語+数学ⅠA+数学ⅡBC+英語】		- (得点率)	335.55 55.9%	- (得点率)	350.74 58.5%	▲ 15.19 -2.5pt	
国語(200点)	国語	438,156	116.37	437,209	126.67	▲ 10.30	
地理歴史、公民 (100点)	地理総合、地理探究	143,237	61.87	125,622	57.48	4.39	
	歴史総合、日本史探究	124,431	62.29	114,599	56.99	5.30	
	歴史総合、世界史探究	78,710	60.88	69,273	66.12	▲ 5.24	
	公共、倫理	30,965	64.24	29,042	59.74	4.50	
	公共、政治・経済	143,238	63.59	127,120	62.66	0.93	
	地理総合／歴史総合／公共	8,166	51.73	7,791	47.15	4.58	
	地理総合(50点)	6,355	24.27	5,950	21.75	2.52	
	歴史総合(50点)	4,477	24.98	4,005	24.83	0.15	
公共(50点)	5,342	29.27	5,477	25.28	3.99		
数学(100点)	① 数学Ⅰ、数学A	343,000	47.20	308,344	53.51	▲ 6.31	
	数学Ⅰ	3,280	28.53	3,090	28.08	0.45	
	② 数学Ⅱ、数学B、数学C	317,586	54.52	285,563	51.56	2.96	
理科(100点)	物理基礎／化学基礎／生物基礎 ／地学基礎	135,176	64.48	135,066	59.95	4.53	
	物理基礎(50点)	18,486	34.68	18,379	24.78	9.90	
	化学基礎(50点)	89,094	28.58	90,939	27.00	1.58	
	生物基礎(50点)	114,187	36.46	114,388	31.39	5.07	
	地学基礎(50点)	48,438	28.17	46,285	34.49	▲ 6.32	
	物理	145,203	45.55	144,761	58.96	▲ 13.41	
	化学	181,584	56.86	183,154	45.34	11.52	
	生物	56,314	55.01	57,985	52.21	2.80	
地学	2,701	44.29	2,365	41.64	2.65		
外国語(200点)	英語	リーディング(100点)	455,114	62.81	453,668	57.69	5.12
		リスニング(100点)	453,425	54.65	451,864	61.31	▲ 6.66
		合計	-	117.46	-	119.00	▲ 1.54
	ドイツ語	104	109.87	96	127.24	▲ 17.37	
	フランス語	87	111.93	116	130.59	▲ 18.66	
	中国語	866	145.88	874	166.02	▲ 20.14	
韓国語	178	140.04	235	146.91	▲ 6.87		
情報(100点)	情報Ⅰ	305,202	56.59	279,718	69.26	▲ 12.67	

<注>

- ① 地公の「地総／歴総／公共」は各分野50点で2分野選択(計100点)。受験者数と平均点は科目全体と、各分野のもの。理科の「物基／化基／生基／地基」も同じ。
- ② 英語の合計平均点はリーディングとリスニングの平均点を足したもの。
- ③ 表中「平均点前年差」の▲印はダウンを示す。
- ④ 得点調整は、対象となる「地理歴史＝『地総／歴総／公共』を除く各科目間」、「公民＝同左」、「理科＝各発展科目間」のうち(受験者数が1万人未満の科目は対象外)、最大の平均点差が開いたものは「化学－物理」の11.31点で、実施されなかった。

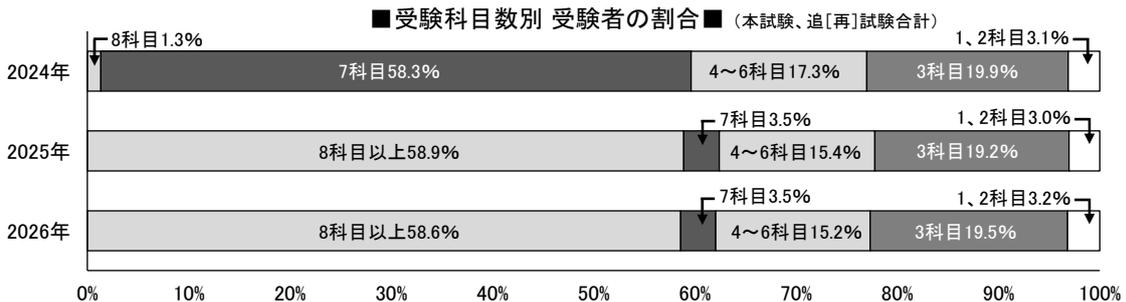
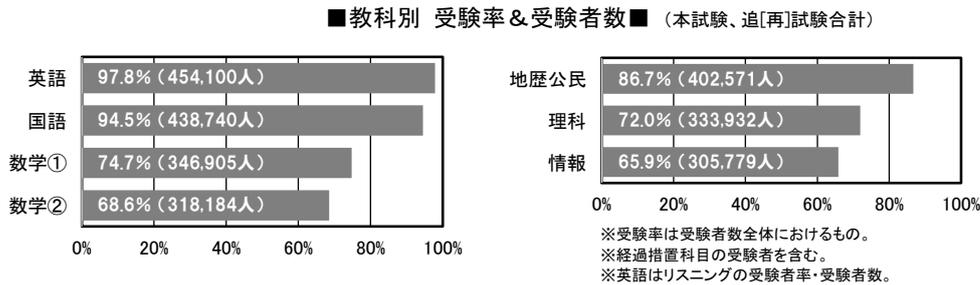


【基幹3教科平均点合計】(国語＋数学ⅠA＋数学ⅡBC＋英語＝600点満点)
 平均点＝335.55点(15.19点ダウン)／得点率＝55.9%(2.5ポイントダウン)
 (前年350.74点／58.5%)

【6教科7科目加重平均点】(国語＋数学2科目＋外国語＋地公1科目＋理科1科目＋情報＝900点満点)
 平均点＝509.71点(25.86点ダウン)／得点率＝56.6%(2.9ポイントダウン)
 (前年535.57点／59.5%)

上のグラフと囲みは共テ全体の難易度を見るために、仮に文理共通で「地公1＋理1科目」とした場合の6教科7科目900点満点の平均点を示したものだ。グラフにあるとおり、新課程入試の初年度は平均点が高くなることが多い。そのため2年目となる今年は予想されていたとおり全体的に落ち込み、対前年で25.86点ダウンした。過去には30点、あるいは40点以上アップダウンした年もある。その中で今年はやや大きめのダウンと言える。特に国語、情報Ⅰ、数学ⅠA、物理のダウンが影響した。

●教科別 受験率



昨年の新課程入試から、国公立大の典型的な受験教科は情報Ⅰが加わって6教科8科目になった。8科目以上の受験者は全体の6割近くを占め、国公立大の志望層が厚いことがわかる。ただし8科目以上を受験した27万人に対して、実際に8科目以上が必要な大学の出願にまで結びついたのは20万人程度と見られる。

科目別結果

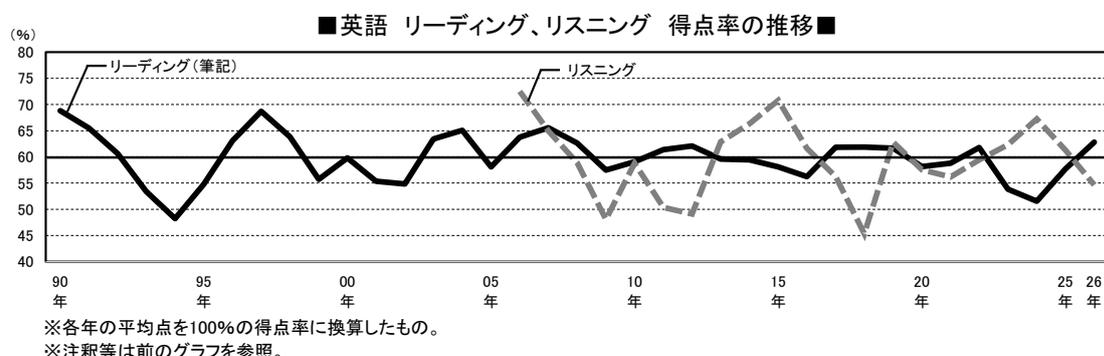
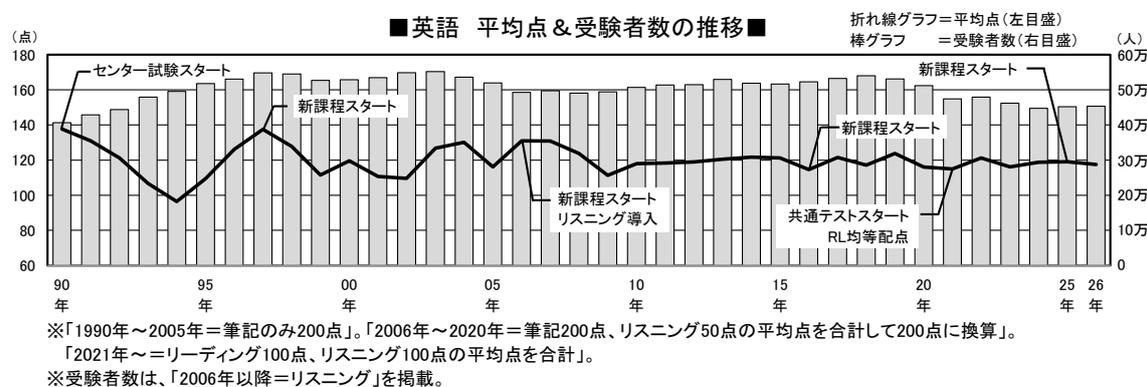
※以下、文中の点差等は対前年。

●英語[平均点;リーディング=62.81点(+5.12点)、リスニング=54.65点(-6.66点)、合計=117.46点(-1.54点)]

英語は2010年以降、全体の平均点(RとLの合計、200点換算)に大幅なアップダウンはなく、120点前後で推移している。今年も同様だ。

リーディングは昨年と比べて問題形式に大きな変化はなく、難易度的にも取り組みやすい問題が多かった。「必要な情報を読み取る力」や「情報を整理する力」などが求められている。発表用のスライドやレポート作成の場面でメモやアウトラインをまとめるといった発信力に結び付くような問題が目立った。

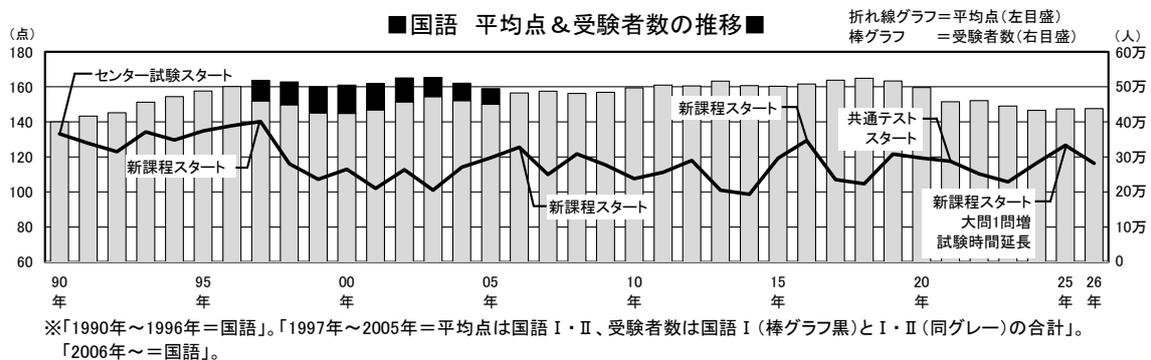
リスニングも同様に情報を理解・整理したり、推測したりする力が求められている。聞きとるだけでなく、対話、複数の説明、講義の内容を理解していないと正しい選択肢を選べない。



●国語[平均点;国語=116.37点(-10.30点)]

昨年まで2年連続で対前年+10点以上の大幅アップが続いていたが、今年は-10.30点の大幅ダウンとなった。

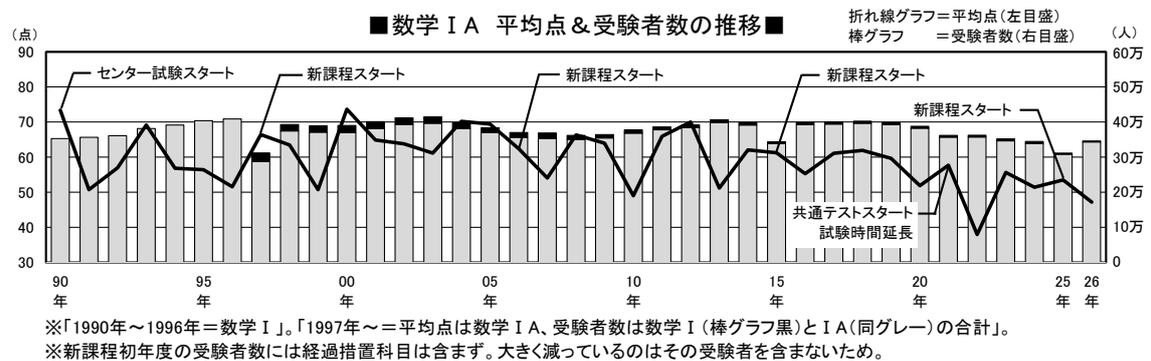
第1問の論理的な文章は昨年同様、単独素材でセンター試験に近い形式。第2問の文学的な文章はメインの小説に加え、それに関するノートと対話文が出題された。昨年から追加された第3問の実用的な文章は、生徒が書いた文章とその資料で構成。資料には図が1点入っているが、昨年のようなグラフは出題されなかった。第4問の古文は、昨年は2つの作品と生徒の対話文が出されたが、今年は同一作品から2か所が出題されたのみ。第5問の漢文も昨年の2つの作品に対して、今年は1つの作品と短い資料(漢文)が1点だった。

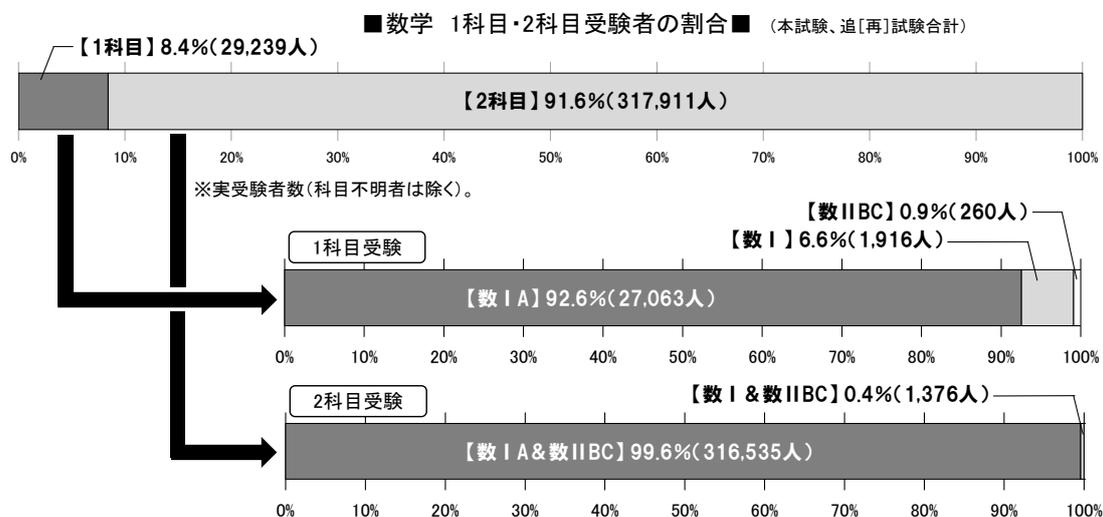
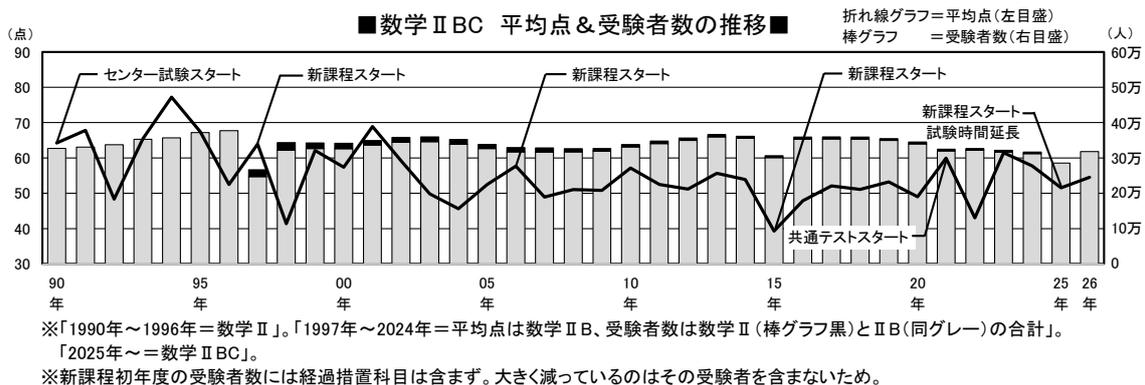


●数学[平均点;数学ⅠA=47.20点(-6.31点)、数学ⅡBC=54.52点(+2.96点)]

数学ⅠAは-6.31点のダウンで4割台まで落ち込んだ。この平均点は過去2番目の低さだ。国公立大志望者にとっては文理共通でダメージになったと思われる。出題分野は「第1問＝集合と命題、三角比」「第2問＝二次関数、データの分析」「第3問＝図形の性質」「第4問＝確率」。各大問では前半で基本的な内容を問う、後半で前半を基に考察させて思考力を問う、といった構成が目立った。

数学ⅡBCは若干アップ。「第1問＝図形と方程式」「第2問＝三角関数」「第3問＝微分・積分」「第4問＝数列」「第5問＝統計的な推測」「第6問＝ベクトル」「第7問＝平面上の曲線と複素数平面」(第4～7問は3問選択)。選択肢から選ぶ問題が「昨年45⇒今年66(マーク数)」の1.5倍に大幅増。また、実社会を題材にした問題は第5問のみだった。



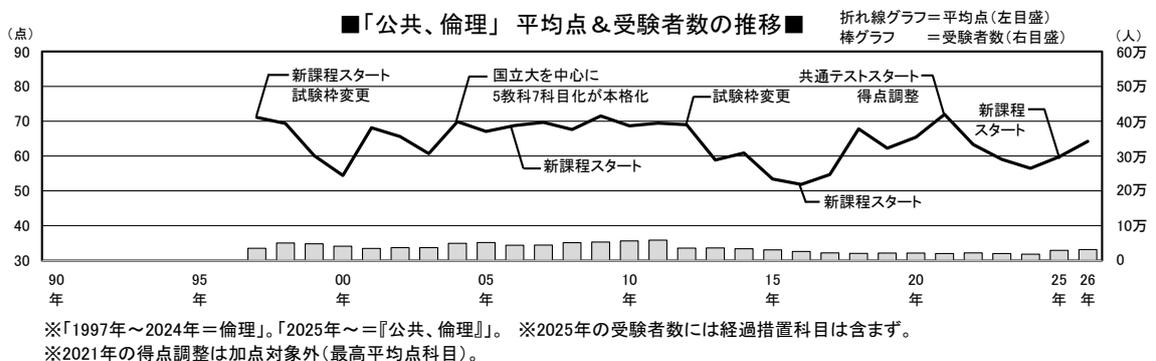
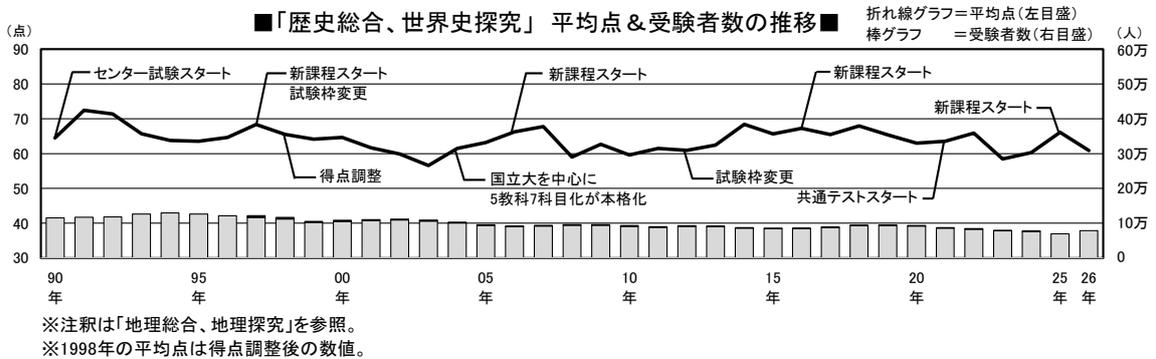
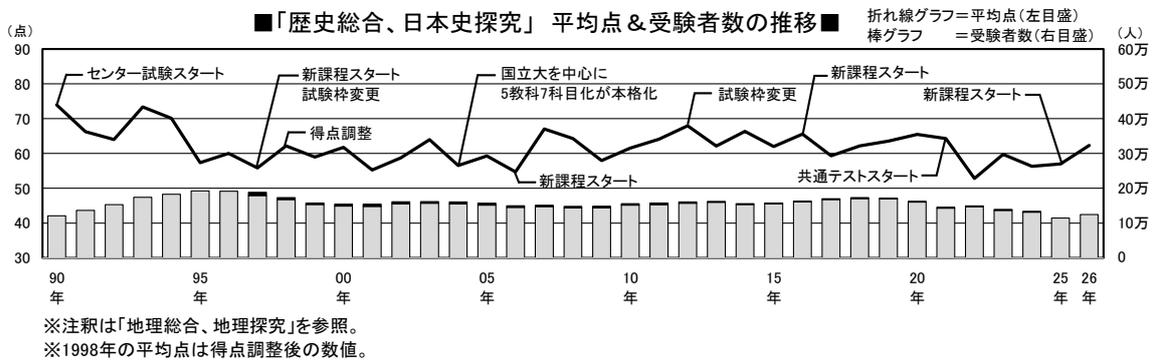
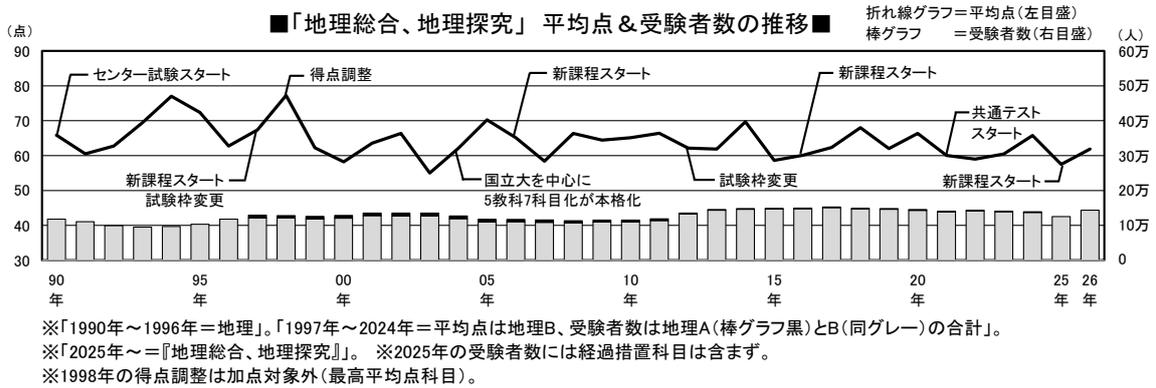


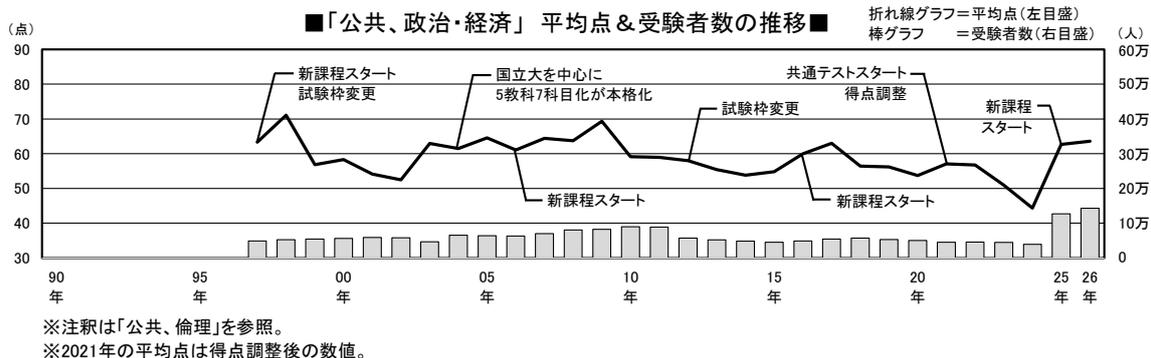
- 地歴・公民[平均点;「地総、地探」=61.87点(+4.39点)、「歴総、日探」=62.29点(+5.30点)、「歴総、世探」=60.88点(-5.24点)、「公共、倫理」=64.24点(+4.50点)、「公共、政経」=63.59点(+0.93点)]

地公主要5科目のすべてが60点以上で点差もほとんど開かなかった。前年と比べて大幅なアップダウンもなく、地公は落ち着いた結果となった。

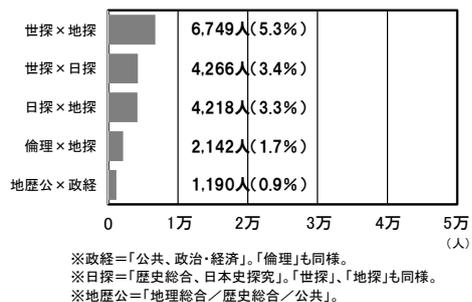
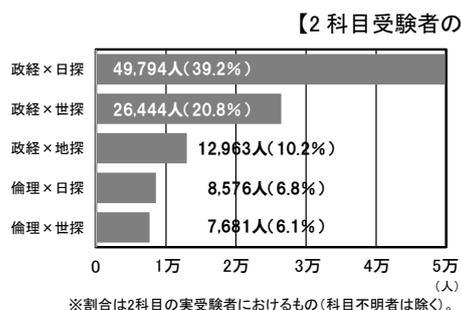
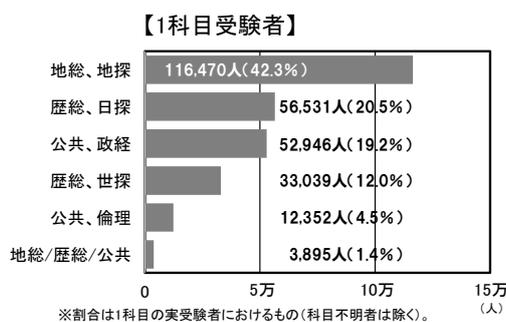
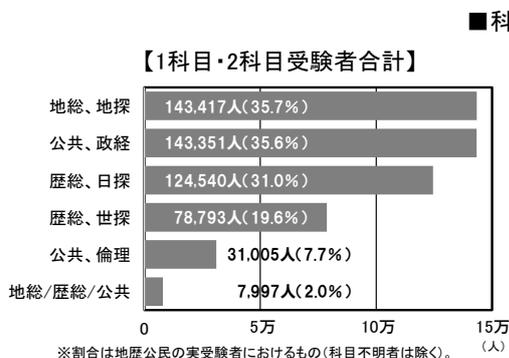
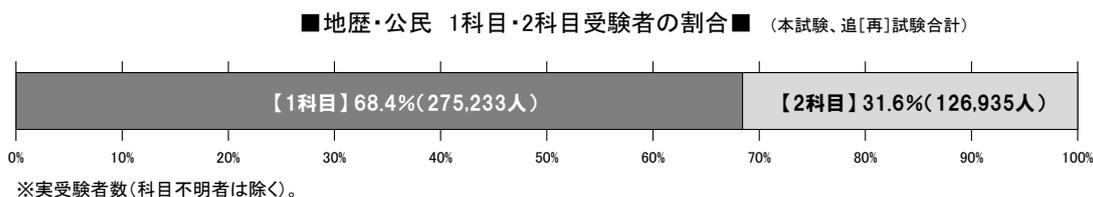
各科目を通じて資料(史料文、グラフ、地図、写真、絵画、イラスト、パネルなど)が与えられる問題が多く、また、探究活動や言語活動の場面設定も多い。これらは資料を客観的に検討する、多面的・多角的に考察する、といった指導要領の理念を反映したものだ。細かな用語や年代の暗記よりも、その意義や時代の流れといった本質的な理解に基づいた知識と、それを活用する思考力が必要だ。問題文の分量が多いので読解の速さも求められる。

出題内容としては時代や地域がバランスよく出題された。その中で「歴総・日探」「歴総・世探」では政治史や経済史に関わる出題が目立った。この点も各教科の実用性を重視する現在の指導要領の方向性の表れだろう。





科目別の受験者数は下のグラフのとおり。文系受験生にとって重要度が高いのは日本史・世界史だが、受験者数のトップ（地公1・2科目受験者合計）は近年、地理と政経の争いになっている。地理は国公立大理系志望者の1科目として、政経は国公立大文系志望者の地公2科目目として「票」を集めている。今年は本試験では1名差で「公共、政経」に軍配が上がったが（公共、政経＝143,238人／地総、地探＝143,237人）、追試・再試で「地総、地探」が抜き去った。

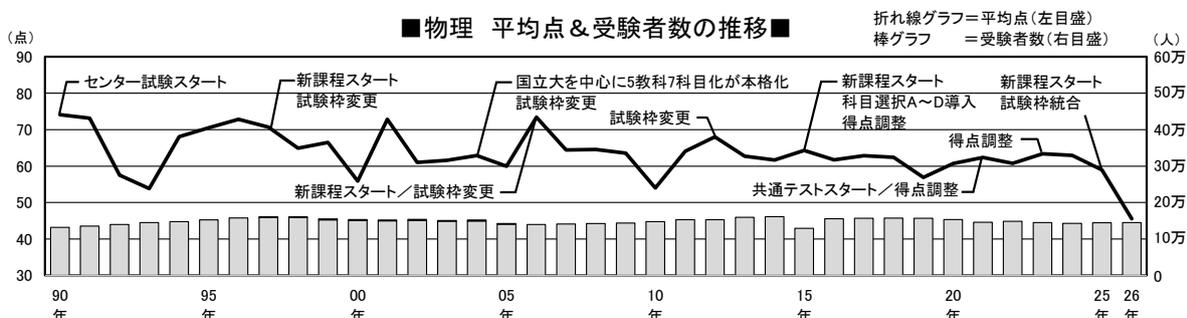
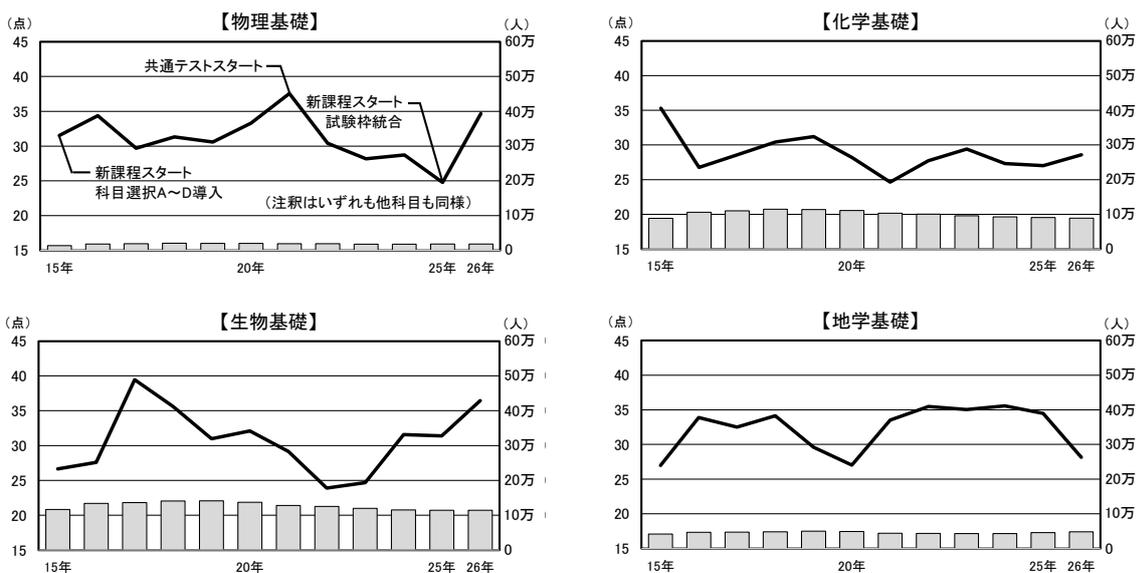


- 理科[平均点;物基=34.68点(+9.90点)、化基=28.58点(+1.58点)、生基=36.46点(+5.07点)、地基=28.17点(-6.32点)、物理=45.55点(-13.41点)、化学=56.86点(+11.52点)、生物=55.01点(+2.80点)、地学=44.29点(+2.65点)]

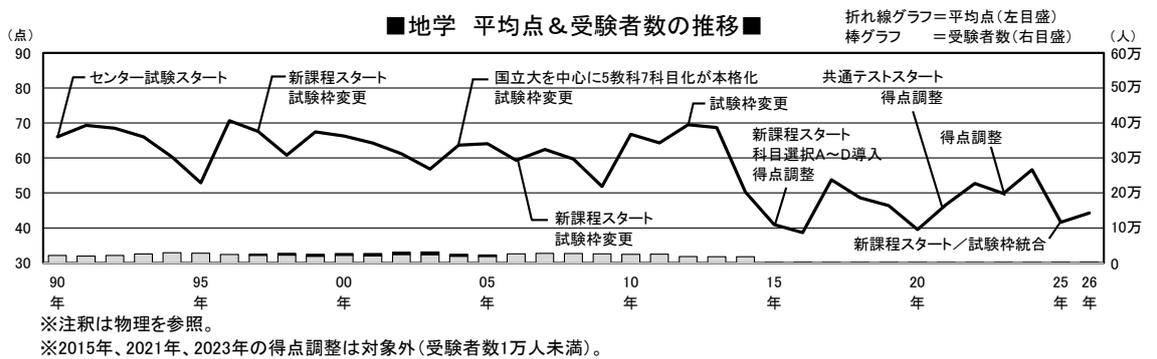
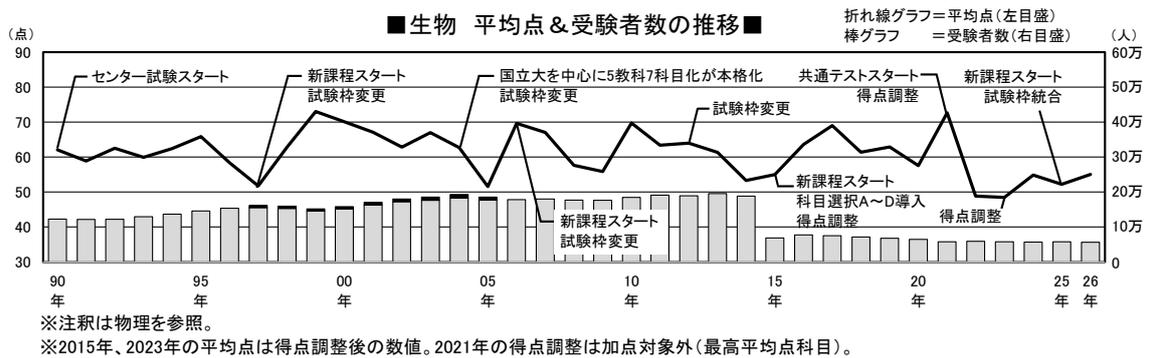
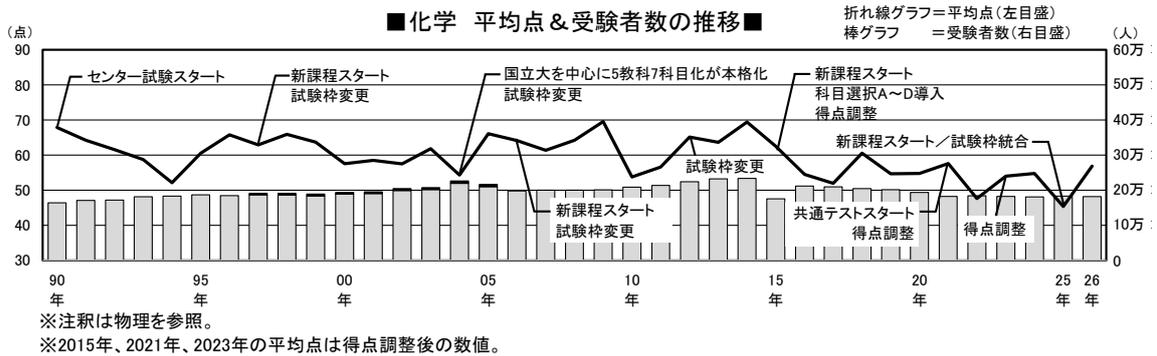
物理は大幅ダウン。初の平均点 4 割台で過去最低。対照的に化学は昨年の過去最低から大幅アップとなった。

物理は各分野から幅広く出題。実験の場面や会話形式の問題は出題されなかった。一方で教科書や問題集ではあまり見られないような暗記だけでは対応が難しい問題が目立った。化学は知識問題は基本～標準レベルのものが多く、計算結果を数値の穴埋めで答える問題も出なかった。生物は知識問題、実験の問題、資料を読み解く問題がバランスよく出題された。図表の数が増加したが、選択肢が少なく解答はしやすかった。

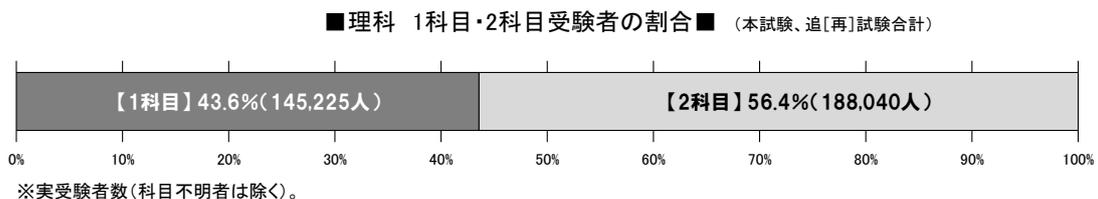
化学基礎は第 1 問が知識問題の小問集合、第 2 問が思考力問題でグラフの数値を読み取って計算する問題が出された。生物基礎は各分野から幅広く出題。実験の問題や資料を読み解く問題でも、知識だけで正誤が判断できる問題もあった。地学基礎も各分野から出題。知識問題が増加した一方で、計算問題も出題された。



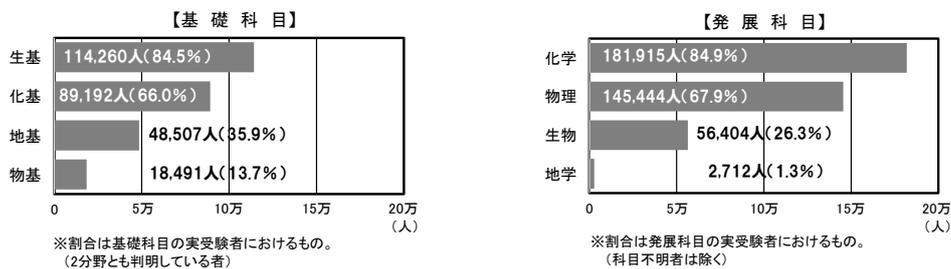
※「1990年～1996年＝物理」。「1997年～2005年＝平均点は物理 I B、受験者数は物理 I A(棒グラフ黒)と I B(同グレー)の合計」。
 「2006年～2014年＝物理 I」。「2015年～＝物理(物理基礎の受験者数は含まず)」。
 ※2006年、2015年の受験者数には経過措置科目は含まず。
 ※2015年、2021年の平均点は得点調整後の数値。2023年の得点調整は加点対象外(最高平均点科目)。



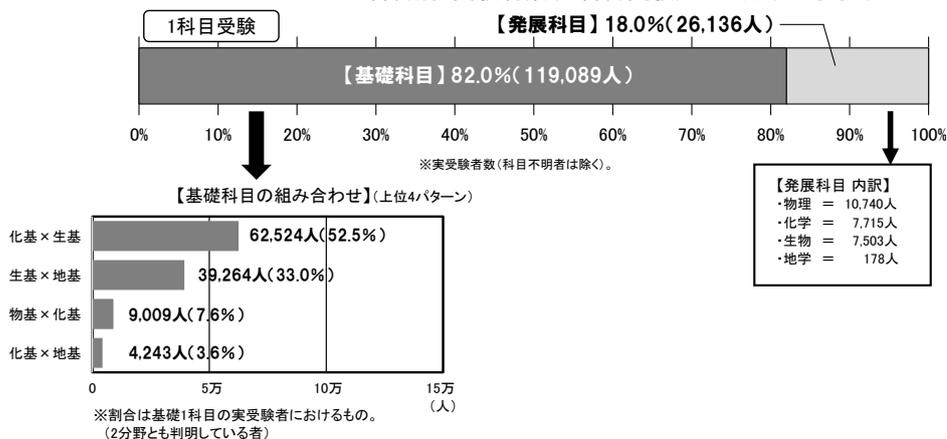
理科の1科目受験者は8割以上が基礎科目を選択。基礎1科目の受験者は国公立大文系(そのほか看護系など)志望者が中心となるため物理基礎をからめた選択は少なく、「化基×生基」または「生基×地基」が大半。これに対して2科目受験者は9割以上が発展2科目。2科目の組み合わせは理系の典型的な「物理×化学」が圧倒的多数で3/4。残りの1/4が農学部や薬学部などの生命科学に関連する学部志望者が中心の「化学×生物」。この2パターンでほぼ全体を占める。



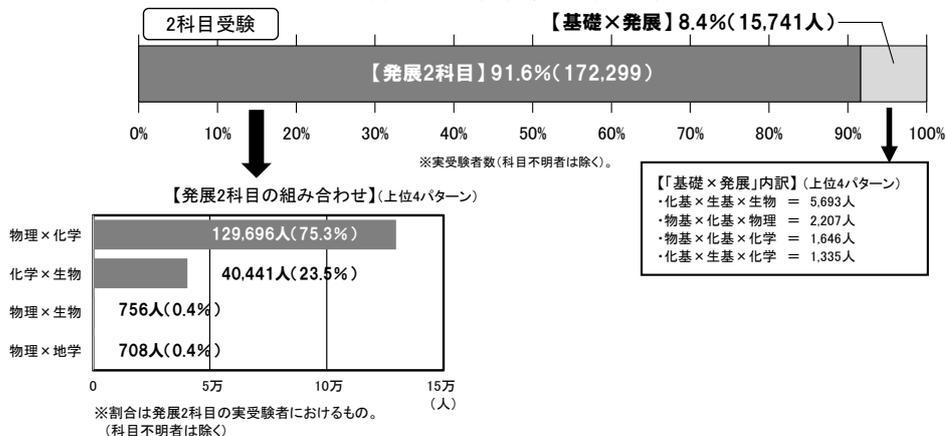
■科目別 受験者数(1科目・2科目受験合計)■ (本試験、追[再]試験合計)



■科目別 受験者数(1科目受験)■ (本試験、追[再]試験合計)



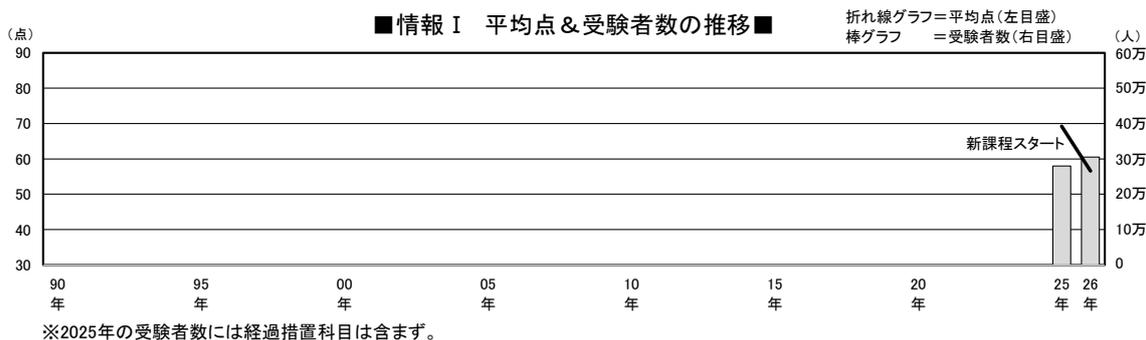
■科目別 受験者数(2科目受験)■ (本試験、追[再]試験合計)



●情報[平均点;情報 I =56.59点(-12.67点)]

平均点は大幅ダウン。しかし導入初年度の昨年度が7割に届きそうな平均点だったため、難易度としては適正になったと言える。

内容としては情報Iの各分野から出題。ほとんどが身近なテーマについて情報Iの知識を活用して解いていく問題。今後もこれが共通情報の定番になっていくだろう。受験生には初見であろう問題も出題されたが、誘導が丁寧で資料を読み解いていけば正答にたどり着くことができる。ただし問題文や図が増加したため、時間が足りなかった受験生もいたと思われる。



スタナイン

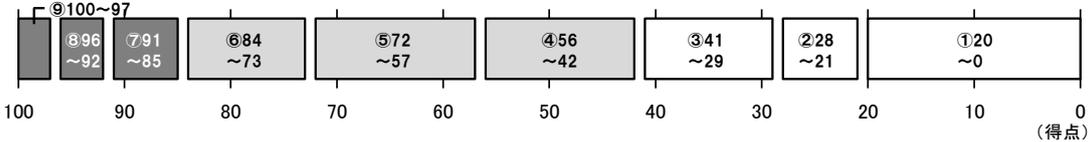
スタナインは各科目で受験者の成績を 9 段階に分けたもの。得点分布に応じて変動するので、おおまかな偏差値のようなものだと思えばよい。大学はたとえば「全教科でスタナイン 6 以上を出願資格とする」など入試に利用することができる。これまでの合計点だけによる選抜方法とは異なる多様な入試が設定できそうだが、2021 年のスタート以来一向に広がらない。追・再試験のスタナインがない（正確には本試験のスタナインが本・追・再試験全体のものとしてされている）のが最大の難点だろう。

全国に先駆けて利用していた静岡理工科大は今年から取り止めてしまった。現在利用しているのは千葉大－国際教養（総合型）、鳥取大－工（総合型Ⅱ）のみ。千葉大は来年、園芸（総合型）でも導入する。

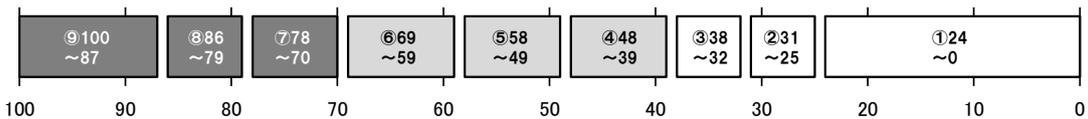
■主要科目のスタナイン■

※本試験、追[再]試験共通。 ※グラフ横軸は得点、マル数字はスタナインの成績、数字の範囲は得点を表す。
 ※各段階は受験者の集団を得点順におおよそ以下の割合で分割。
 「①=4%」「②=7%」「③=12%」「④=17%」「⑤=20%」「⑥=17%」「⑦=12%」「⑧=7%」「⑨=4%」。

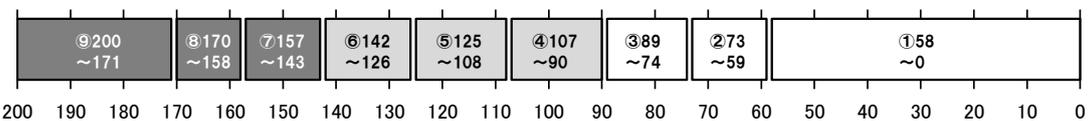
【英語(リーディング)】



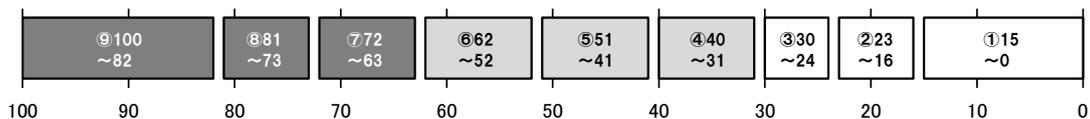
【英語(リスニング)】



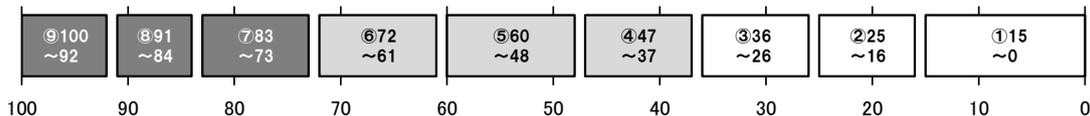
【国語】



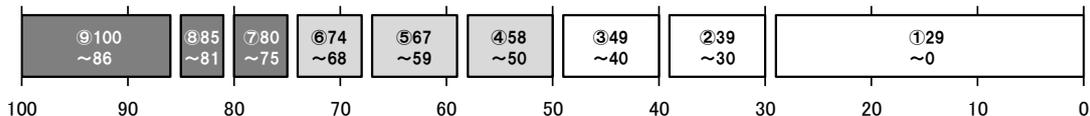
【数学Ⅰ、数学A】



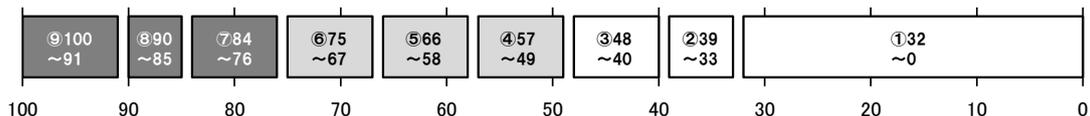
【数学Ⅱ、数学B、数学C】



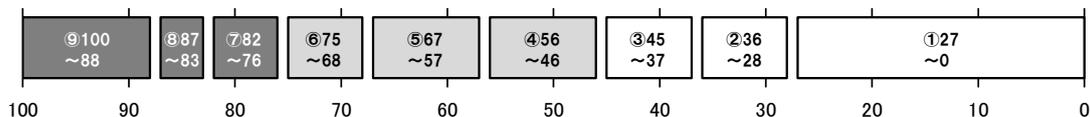
【地理総合、地理探究】



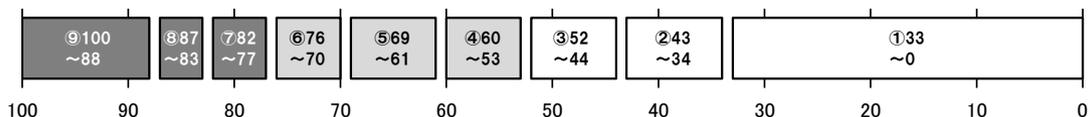
【歴史総合、日本史探究】



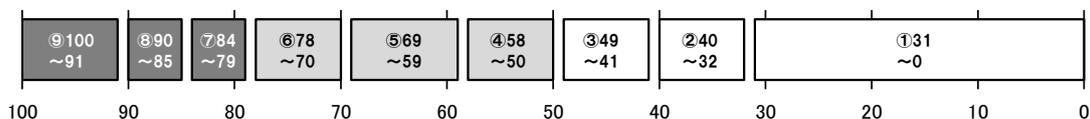
【歴史総合、世界史探究】



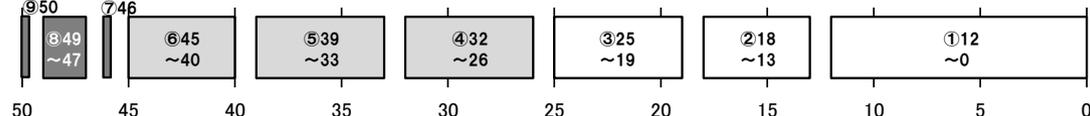
【公共、倫理】



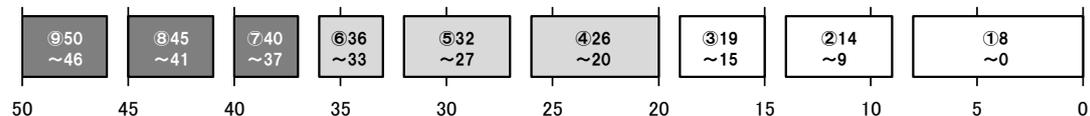
【公共、政治・経済】



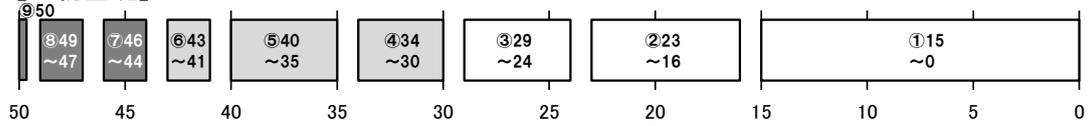
【物理基礎】



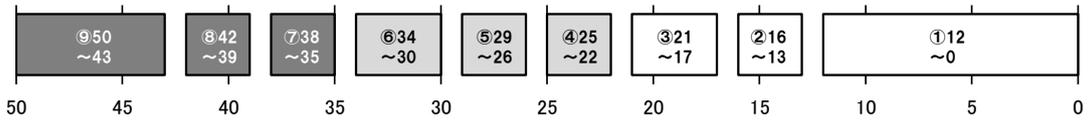
【化学基礎】



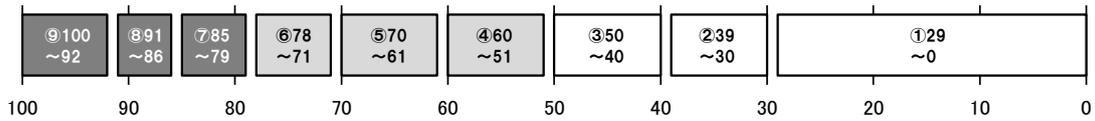
【生物基礎】



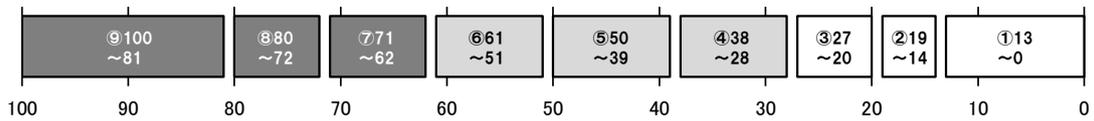
【地学基礎】



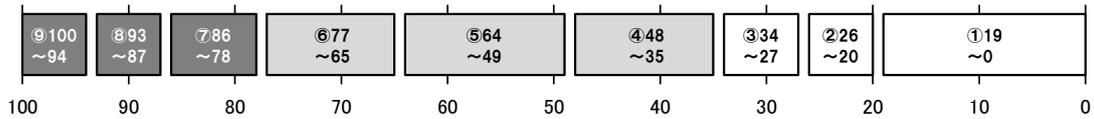
【理科基礎 合計】



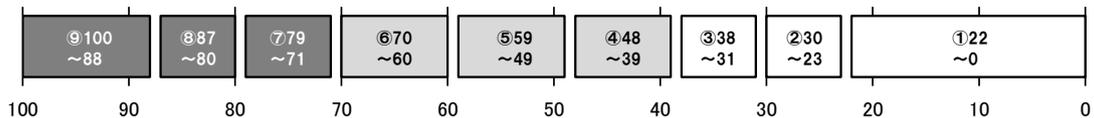
【物理】



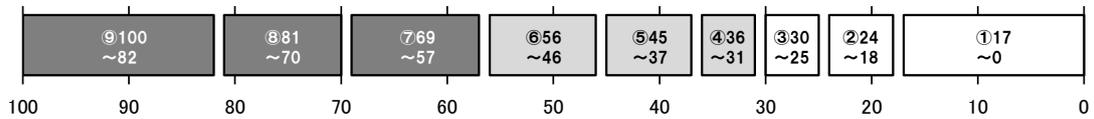
【化学】



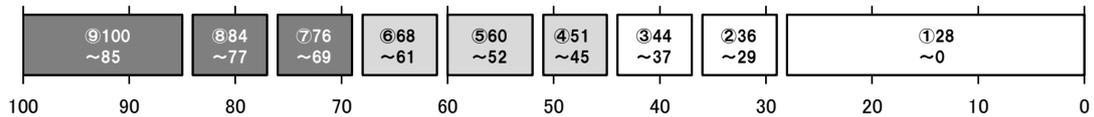
【生物】



【地学】



【情報 I】



(2026.02 石井)